水の恩人　大久保甚之丞＊1

明治時代に香川用水の原形を計画した人物「大久保甚之丞」＊1

■ 大久保甚之丞（おおくぼ　じんのじょう）＊1　1849年から1891年

「笑わしゃんすな百年さきは、財田の山から船出して、月の世界へ往き来する」この歌は、四国新道（現在の国道32号）を建設した が明治のはじめに詠ったもので、大久保甚之丞 ＊1は、道路開発の先駆者であり、また水利開発にも大きな関心を持っていました。ふるさとの山から船で下るこの歌には、吉野川分水の大計画がすでに託されているともいわれています。ゆったりと流れる吉野川の水は、水の確保に努めてきた香川の人々にとって、昔から関心があったことでしょう。

しかし、現実にその水を讃岐山脈を貫いて香川県に引いてこようと考えたのは、大久保甚之丞＊1がはじめてでした。 の計画は、四国新道の猪ノ鼻峠をトンネルにして、吉野川の支流、伊予川から水路を設け、トンネル内の側溝に水を引き、三豊、仲多度、綾歌の3つの郡に水を供給するもので、まさに現在の香川用水の原形といえます。明治18年（1885年）1月 はこの計画を内務省に提出しますが、採択されませんでした。それから百年を経て、大久保甚之丞＊1の夢が叶い、吉野川からの導水を実現する香川用水が完成しました。

＊1　水の恩人の名「大久保甚之丞」の「甚」は機種依存文字のため、本文中での表示ができません　正しくは、言に甚です。